

麻疹感染について

最近、麻疹(はしか)にかかった妊婦が早産や流産する症例が報告されています。また、妊婦自身も脳炎など重症化することも報告され、周産期医療の分野で大きな問題になっております。

麻疹は、かつては「ハシカの命定め」といわれるぐらいにこどもでの死亡率が高く、子供の病気の中でも最も恐ろしい病気のひとつでした。しかし医療が進歩したため、麻疹で死亡することも少なくなり、さらにワクチンが実用化されました。麻疹は今や過去の病気と思われがちですが、現在も年間 10~30 人程度の方の感染が報告されています。

麻疹の予防接種は 1978 年に定期接種になり、現在では約 9 割の子供がワクチンを受けていました。しかし、それ以前は任意接種であったため約 3 割程度しかワクチンを受けておらず、1977 年以前生まれの方は自然感染せず免疫をもたないまま妊娠する可能性があります。

妊婦が麻疹にかかると

- 妊婦が麻疹にかかると非妊娠女性に比べて重症化しやすい(非妊婦での肺炎は 9.8%、死亡率 0.5%、妊婦での肺炎の発症は 2.6 倍、死亡率は 6.4 倍)。
- 妊婦が麻疹にかかると流早産しやすい。(3 割が流早産。その 90%は母体発疹出現から 2 週 以内に流早産)。
- 妊娠中に麻疹に罹患した場合、風疹のように先天奇形を生じる率は低い。
- 抗体のない母親から生まれた新生児が 1~2 歳までに罹患すると重症化することが多い。
- 1978 年前後に生まれた人のワクチン接種率が低いことがわかっています。

妊娠前に感染の既往や抗体の有無を確認し、免疫がなければワクチンを受けておくことで妊娠中の感染を防止できます。家族の方も同様に確認し、家族からの感染の危険を取り除いておくことが大切です。しかも、ワクチン接種者は罹患しても軽症で済みます。

以上を踏まえて、麻疹抗体価の検査をお勧めします。妊娠後の感染を防ぐために、女性だけでなく男性も事前に検査を受けることが望ましいと考えます。検査で抗体価がない、あるいは低い方にはワクチン接種をお勧めします。ワクチン接種後、女性は2ヶ月間避妊する必要があります(男性では避妊は不要です)。ワクチン接種は当院で予約の上接種が可能です。